
Flashback

シータ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Flashback

【Zマーク】

Z1599F

【作者名】

シータ

【あらすじ】

駅前の喫茶店で恋人たちが別れて、その後男はどういう行動を取るのか…読んでみてください。

特に何をするワケでもなく、公園のベンチに座り込んでいた。遠くで子供たちのはしゃぐ声が聞こえた。

「楓太、将来絶対結婚しようねー約束だよ?」

「あたしたちに子供ができるたら、どんな子供になるんだろうなー」「楓太? 何ぼーっとしてんの? もしかして…あたしに見とれてたとか? まさかねえー」

……今日でもう三回目だ。ふと気がつくとみのりのことを考えていた。僕はみのりを守つてやれる自信がなかった。だから僕は、みのりから離れることにした。

* * *

「ねえ、どうして? 自信なんてこれからついていくよ…なんで『別れよう』なんて言うの? ねえ…ねえ楓太?」

「ごめん…」

「謝つていたらわかんないよ…理由を教えて?」

「ごめん…」

「謝らないでよ…」

「ごめん…」

しばらくの沈黙の後、店中にいい紅茶の香りが漂つた。僕らが入ったこの店は僕らが付き合う前から通っていた店だった。駅前の人通りの多いところにあるくせにあまり人がいない。だからいつも客は僕らだけだった。

「ミルクティーでござります」

「どうも」

いつもよりミルクティーは甘かつた。なのに、どうしてだか苦くて切ない味がした。

「…ねえ、このあと遊園地行こつか？ あたし観覧車乗りたい！」

「えつ…？」

「いいじゃん、あたしの…最後のわがまま…聞いてよ」

「…わかつた、行こう、遊園地。観覧車も乗ろう」

「本当に！？」

「ああ」

「やつた…ありがとう…」

遊園地へ着いたものの、いつものような賑やかさはまるでなかつた。平日の八時だったからだろうか。僕らを生温い風が包んだ。遊園地は夢の世界なのに、現実に引き戻された気がした。

マダスキナノニネ…そんな声が聞こえた気がした。 そうだ、僕は彼女にウソをついていた。僕は彼女に未練たらたらで本当は別れたくない、誰にも渡したくないのにウソをついてしまった。でも、もう戻ることはないのだろうと心のどつかで諦めてしまつていた。

「観覧車、乗ろうか…ほら、結構空いてるよ」

「そうだな。平日だからじゃないのか？」

「ほらー早く乗ろう」

「ちょっと…もうーお前は変わらないな…子供みたいだよ」

「ちょっとそれ、どういうことーもう大人だよ、あたしー」

「はいはい、乗ろう」

観覧車は人が一・三人しかいないくて、すぐに順番が回つて来た。外に見える街の景色はどこもかしこもキラキラしていて、どんよりしていたのは僕らだけのようだった。

「……」

「……」

「ねえ……なんか言つて」

「……」

「なんか言つてよ」

「……」

「なんか言つて……」

僕は何も言つことが出来ず、みのりの肩に手を置いた。いつもの、みのりの肩なのに、とてもなく遠い存在に思えた。悲しみに耐えられずみのりの肩から手を離した。

「ははは……すつごい夜景綺麗だねえ……」

「……そう……だな」

「」
じつして僕らは終わりを迎えた。

＊＊＊

相変わらず僕はベンチから立ち上がりにいた。心……いや、身体がズシン、と痛む。……まだ……間に合つだらうか？

僕はケータイに入っている、まだ消せずにいた彼女の番号を探した。

プルル……この呼び出し音が僕には永久に思えるほど長く感じる。彼女は出でくれるのだろうか、それとももう僕のことなど忘れて……そんな物思いにふけつていた時間は不意に途切れた。

『……もしもし?』彼女の声だ……さっぱりとしていて、でも甘く

色香が香る、僕の好きな声。

「あ…もしもし」

『もしかして楓太?』

「うん」

『あはは…元気だった?』

「うん、そつちは?」

『元気だよ』

「…」

『…』

「…あ、あのやつ』「

「…何?」

『そつちこそ』

「あのや…彼氏出来た?」

『あはは…何それーちょっと失礼じゃないのー?そつちこそ彼女出来た?』

「…僕がそんなにモテるよつて見える?」

『あははつ』

「なんだよ、その笑いはー」

『変わんないねえ、本当楓太は変わんない』

「…なあ、久しづりに話しないか?あの店で

『…うん、いいよ』

「じゃ、また後で」

十六時、三十分。

ちょっと…早過ぎただろうか?でも昔から僕はせつかちだった。

そのせいで友達や彼女を急かしてしまっていた。

「……はあつ……はあつ、『J…めん…ひよつ…とのんびり…しちやつて

て』

「いいよ、全然…僕のほつJ…めんな…みのりに無理させちまつ

りあつ、とにかくで話つて何なの?」

「あのや…」

そんな言葉を繋ぎながら、僕の手は落ち着きなく尻ポケケットをいじくっていた。彼女に伝えたいことがあって、それを伝え終えたら渡そうと思つてているものがそこには入つていた。

「ん?どうした?楓太?」

「あのや、みのり…僕は自分勝手でわがままな人間だよ。そんな僕の話を聞いてほしいんだ」

「うん」

「僕は…僕は散々勝手なことを言つた。でも…やつぱりみのりをほかの人へ渡したくないよ」

「うん…」

「僕のことを許してもらえるなら、僕と一緒にしてくれるなら、これを貰つてください」

「えつ…」

そこには、キラキラと夢へと誘つてくれるよつた輝きの指輪が楓太の手の中に収まつていた。

「…」

「みのり?」

「もう…つ、早く言つてよね…バカ…」

「…『J…めんな

「うれしい…』

「手、貸してみ」

「うん?」

その指輪はまるでみのりの指にはめるために作られたかのようにぴつたりだった。デザインもあまり派手ではなかつたが、さりげない

存在感があった。

「ミルクティーでござります」

「「ありがとうございます……あつ」」

「「……ふつ、あはは……」」

こんな時間がずっと続けばいいと思つた。彼女とだったら、みのりとだったら続く気がした。いや、きっと続くだろう。彼女といふこの時間がかけがえのないくらい大切な時間なのだから。

End

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1599f/>

Flashback

2011年1月6日14時20分発行